逢えてよかった

その女生徒と会ったのは、私がスクールソーシャルワーカーとして勤めていた中学校でした。女生徒は中学に入学し、張り切って学校生活を始めていたのですが、六月には笑顔が消えていました。

教室でも部活でも、人と関係を作ったり継続することが、思うようにできなくなりました。一人でいることが増えていくにつれ、放課後はスクールソーシャルワーカーの私と話をするようになっていったのです。

女生徒は「もう消えたい」と、何度口に出したことでしょう。小さな頃から「みんなを引っ張るリーダーになる」、「いつも友だちに囲まれてキラキラしている存在になりたい」と願い実行してきましたが、中学ではそれが通用しなくなり、親に相談しても「もっと頑張りなさい」としか言われず、日々思いつめ生きる意欲さえなくしてしまいました。

女生徒は、下を向いて私の所にやって来て、話をしては「うん、やってみるね！」と笑顔を見せますが、毎日その繰り返しです。―どう頑張ればよいのか、何をすればよいのか分からない―女生徒の苦悶は続きましたが、登校を続ける力だけは持っていました。

その後、高校に進学。本人は「これでリセットできる」と思っていたのですが、半年後には別の高校に転入、更に二年生の途中でフリースクールに転入しました。女生徒はフリースクールの雰囲気が合ったのか、久々に笑顔を見せながら勉強や学校行事に取り組むことができ、念願の大学進学にこぎつけたのです。

島根県　正禅寺　住職　吉長裕教

しかし、喜びは束の間。入学直後から周りと全くコミュニケーションが取れなくなり、間もなく中退することになりました。家族関係に問題があり、家に帰ることもできないので、自立支援施設にお世話になることになりました。そこで自分と向き合う日々を、6年間過ごすことになったのです・・・。

私は中学以来、女生徒の心の叫びを聞き続けましたが、生きることを応援しながらも「彼女が立ち直るのは、もう無理かも知れない」と何度思ったことでしょう。

二十五才になった今年の春。彼女はついに働き始め、施設を出て一人暮らしを始めました。「和尚さんに会えたことで、生きることを諦めずにすみ、今の私があります。会えてよかった。ありがとう」。

私たちは自分一人で生きているのではなく、多くの出会いや支えによって、初めて今の自分にたどり着きます。そして、それらの数限りない出会いに感謝し、周りの多くの人々のために、互いに力を尽くしていくことが、仏教として大切な行いとなります。

生きづらさを抱えている彼女が出会ったのは、もちろん私だけではありません。しかし「いつか私も、和尚さんのように、『生きることに苦しんでいる人』の力になれるように頑張っていきます」という言葉に、私は心から有り難いと思ったことでした。